



アラハバード農村出身のサビトリ(左)とプージャ(右)。10か月間のコースの一環として、アラハバード有機農業組合主催のフードフェアにて、きのこを起用した料理を発案・宣伝した際に。

## 変化を求める若い世代

川口 景子

アーシャ現地派遣スタッフ

前号の巻頭言で、アラハバードの農村出身の2人の女性が今年の10か月コースに入学し、希望に燃えている様子をお伝えしました。農村保健アシスタントととして活動していた2人は、その中でも責任感が強く一生懸命業務に携わっている姿をスタッフは見守っていました。

彼女たちにとって10か月コースへの入学は、私たちが思うよりもずっと大変なことでした。彼女たちが大学を卒業し、アシスタントになってから、村の人たちに、「大学まで出たのに何をしてるのか」と度々けなされたそうです。サビトリの母親はそれを言われたときに悔しくて涙を流しました。そんな母親にサビトリは、「言いたい人には言わせておけばいいのよ。すぐに私たちがやっていることが正しいことだと思う日が来るわ」と言い切ったそうです。

村では、大学を出た女の子はいいところに嫁に行く、というのが常識です。少しでもいいところへお嫁にいけるように、金銭に多少でも余裕のある両親は女の子を大学に送ります。しかし、それは知識やスキルを活かして社会に貢献するためではありません。汗水たらして働いている大学出の女性がいれば、「大学を出たのに嫁にいけ

ない女」という目で見られてしまいます。そういう環境では、サビトリやプージャのような女性が暑い中埃っぽい村を汗まみれになって、農村の女性達に話をしたり、子どもの体重を測定したりするような、人に仕える仕事をしていることが不思議でならないようです。

プージャは同年代の大学出の村の女性に、仕事のことを冷やかされたときこう答えたそうです。「私は村の女性や子どもにもっと健康になってほしくてこの仕事をしているの。あなたも大学を出たのでしょ。じゃあ、答えられる？妊婦さんや赤ちゃんの健康のために体は何を必要としているのか。」その女性は答えられなかったようです。「答えられないでしょう。大学を出たからといって全てを知ったわけではないわ。私たちが活動しているのは、生活に本当に必要な知識よ。大学ではこんなこと教えてくれないわ。」プージャはこう付け加えました。「ここ(マキノスクール)は、村をよくするために実際に役に立つ知識を実践して学べるところだと思うの。」

彼女達は自分たちの社会に自由な発想で疑問を持ち、共に取り組める仲間を発見し、大切だと思うことに対して正直に行動を起こしました。保守的な農村にも、このように新しい未来に希望を持った若い世代が意外と多くいるのかもしれない。今後、保健事業が拡大していきますが、このような素晴らしい出会いに期待したいと思います。彼女たちの今後の活躍が楽しみです。